

北欧の巨匠に学ぶデザイン

アスプルンド / アールト / ヤコブセン

Learning from the masters of Scandinavian design

ASPLUND 

AALTO 

JACOBSEN 

鈴木敏彦 + 杉原有紀

Toshihiko Suzuki + Yuki Sugihara

0 はじめに／北欧の3人の巨匠について

- 0 | 1 北欧の巨匠に学ぶトータルデザインとは 008
- 0 | 2 北欧3国の3人の巨匠の相關絵巻 010
- 0 | 3 3人の建築家の自然観 016
- 0 | 3 | 1 グンナール・アスプルンド／自然に寄り添う建築「森の墓地、夏の家」 018
- 0 | 3 | 2 アルヴァ・アールト／自然に向き合う建築「セイナッツアロの役場、実験住宅」 026
- 0 | 3 | 3 アルネ・ヤコブセン／自然を取り込む建築「デンマーク国立銀行」 034

1 グンナール・アスプルンド

- 1 | 1 アスプルンドから学ぶトータルデザイン 040
- 1 | 2 人を導くアプローチ 042
- 1 | 3 内と外の境界をデザインせよ 044
- 1 | 4 緑の壁と石の床 046
- 1 | 5 物語る細部 048
- 1 | 6 行為を誘発するかたち 050
- 1 | 7 小さな傾きが豊かさを生み出す 052
- 1 | 8 家具・プロダクトがインテリア空間の質を決定する 054
- 1 | 9 動く仕組みが生活を支える 056

Column 01

アスプルンドの夏の家宿泊案内

058

2 アルヴァ・アールト

- 2 | 1 アールトから学ぶトータルデザイン 064
- 2 | 2 手に触れる部分へのこだわり 066
- 2 | 3 必要最低限という美学 068

062

- 2 | 4 貫入するトップライト 070
- 2 | 5 建築の機能を併せもつ家具 072
- 2 | 6 暖房のデザイン 074
- 2 | 7 音と光のデザイン 076
- 2 | 8 病室のトータルデザイン 078
- 2 | 9 素材とかたち 080

Column 02

アールトのセイナッツアロの役場宿泊案内

082

3 アルネ・ヤコブセン

- 3 | 1 ヤコブセンから学ぶトータルデザイン 088
- 3 | 2 動く仕組みで解決する 090
- 3 | 3 宙に浮く階段の秘密 092
- 3 | 4 トータルパッケージとしての建築 094
- 3 | 5 環境のトータルデザイン 096
- 3 | 6 リデザインというデザイン 098
- 3 | 7 製品として生き続けるプロダクツ 100
- 3 | 8 オルタナティブを出し尽くせ 102
- 3 | 9 建築の機能を併せもつ家具 104

Column 03

ヤコブセンのSAS606号屋宿泊案内

106

4 おわりに／3人の巨匠の作品を巡る旅

- 4 | 1 北欧3国を巡る旅 112
- 4 | 2 グンナール・アスプルンド／スウェーデン 114
- 4 | 3 アルヴァ・アールト／フィンランド 116
- 4 | 4 アルネ・ヤコブセン／デンマーク 120

110

086

038

007

北欧の巨匠に学ぶトータルデザインとは

一般にアイスランドとノルウェーを含む5カ国を
 北欧と呼ぶが、本書ではスウェーデン、デンマー
 ク、フィンランドの3カ国を扱う。近代建築の黎
 明期、偉大な建築家が誕生した。1885年、ス
 ウェーデンにグンナール・アスブルンド、その13年
 後の1898年、フィンランドにアルヴァ・アール
 ト、さらに4年後の1902年、デンマークにアル



ネ・ヤコブセンが生を受けた。3人の建築家は頻繁
 に交流し、相互に影響を及ぼし合いながら北欧モダ
 ンデザインを牽引した。距離的にはヨーロッパの中
 心から離れているため、世界の近代化に対して北欧
 独自の特色を活かしながら発展した。

(1) 北欧の自然・風土に根ざした建築

北欧の自然は厳しく、環境と人間がどのように対
 峙するかが問われる。アスブルンドは「森の火葬場」
 「森の礼拝堂」の設計において、ロッジアを設けて自
 然と建築の融合を図った。半屋外の空間は、日本の
 軒下の領域と同じく自然環境と建物の中に中間領域
 をつくり出した。

(2) 北欧の生活の中心となるインテリア

北欧の国々の緯度は高く、冬場の日照時間は短い。
 室内でロウソクに火を灯し、長時間を過ごすことを
 余儀なくされる。アールトは「建築の本質は内部に
 ある」*¹といい、妻アイノとインテリアの設計に力
 を注ぎ、家具のアルテック社を立ち上げた。ヤコブ
 センも同様にインテリアに注力した。家具や照明だ

けでなく、フォーク、ナイフ、食器等のテーブルウ
 エア、布地の意匠デザインに至るまで、生活に関わ
 るあらゆるものを手がけた。上質なインテリアはい
 ンドアの生活を快適に変えた。

(3) シンプルで長く使えるプロダクト

北欧の土地には森林資源が豊富にあった。当初、近
 代化にともない建築家たちは海外から材料を輸入し
 てモダンな設計を試みていたが、戦争で輸入が困難
 になった。改めて自国の森林の有効利用に目を向け、
 アールトはフィンランドの樺材^{カバ}を、ヤコブセンはデ
 ンマークのブナ材を用いて椅子をデザインすること
 を考えた。それは当時のヨーロッパを席卷した、バ
 ウハウスのパイプ椅子のデザインとは一線を画して
 いた。鉄よりも木、機械化よりも手芸を重視した
 ものづくりは、耐久性とデザイン性をほこり、現在
 も世界中で愛されている。

*「建築—その真の姿は、人がその中に立つたときにはじめて理解される
 ものである」(武蔵野「アルヴァ・アールト」SD選書、鹿島出版会より)



アルヴァ・アールト

1898—1976年(78歳没)
 フィンランド・クオルタネ生まれ。
 家庭ではスウェーデン語、学校ではフィンラ
 ンド語を話して育つ。多言語を学ぶセンス
 に恵まれ、明るい性格で社交性に富み、20
 代の終わりからアスブルンドと友情を結ぶ。
 35歳のときに英語を学び始める。同年、北
 欧の機能主義を体現する「ハイミオのサナト
 リウム」で一躍有名になった。曲線を描く木
 製家具やガラス製品のデザインで海外でも
 高い評価を得る。42歳でMIT教授としてアメ
 リカに進出するが、妻の死を機に帰国、再婚。
 有機的な作風が強まり、教会、大学、図書館、
 ホール等の公共建築を晩年まで手掛けた。酒
 に強く、女性に優しく、金銭に無頓着な国民
 的英雄。マルッカ紙幣に肖像が描かれた。



グンナール・アスブルンド

1885—1940年(55歳没)
 スウェーデン・ストックホルム生まれ。
 多様な建築様式を実践した北欧建築の先駆
 者で、アールトとヤコブセンに多大な影響を
 与えた。従来の教育には飽き足らず、25歳
 でレヴェレンツラ友人とクララスクールを
 創設。35歳で息子を亡くした折りに「森の教
 会」で北欧中世の民族性と西洋の古典主義を
 融合。43歳で古典主義の傑作「ストックホル
 ム市立図書館」、45歳で機能主義の先駆けと
 なる「ストックホルム博覧会」を設計。55歳
 の遺作「森の火葬場」では古代神殿と近代建
 築を融合した。締切りの数日前には作品を完
 成させる勤勉さと、学生の師たる高潔さ、作
 品のディテールに宿る繊細さが持ち味で
 ある。



フィンランド共和国

[公用語] フィンランド語、
 スウェーデン語
 [首都] ヘルシンキ
 [面積] 338,420km²
 [森林面積率] 65.47%
 [人口] 5,385,000人
 [人口密度] 16人/km²
 [独立] 1917年



スウェーデン王国

[公用語] スウェーデン語
 [首都] スtockホルム
 [面積] 450,300km²
 [森林面積率] 62.63%
 [人口] 9,441,000人
 [人口密度] 21人/km²
 [独立] 1523年



アルネ・ヤコブセン

1902—1971年(69歳没)
 デンマーク・コペンハーゲン生まれ。
 遊び心と行動力から小学校の授業を邪魔し
 たり抜け出したりする子供だった。転校先で
 ラッセン兄弟と出会い、建築家を目指す。23
 歳でデザインした椅子がバリ万博で金賞を
 受賞。27歳でラッセンの弟と共作した「未来
 の家」で一躍ブレイクした。そこで予見した
 機能的で新しいライフスタイルを、住宅、家
 具、プロダクトを通じ実現した。酒は飲まず、
 人とも付き合わず、所員に横暴だと言われて
 も猛烈な仕事量をこなした。庭いじりと甘い
 ものと絵を描くことを好んだ。ゴダヤ系のため
 一時期スウェーデンに亡命したが、終戦後
 はデンマークに戻りモダニズムを牽引した。



デンマーク

[公用語] デンマーク語
 [首都] コペンハーゲン
 [面積] 43,090km²
 [森林面積率] 12.67%
 [人口] 5,973,000人
 [人口密度] 129人/km²
 [独立] 8世紀

デンマーク

★コペンハーゲン

北欧3国の3人の巨匠の相関絵巻

1886
フランス・ベルギー
アルヌーボ
ユージェント



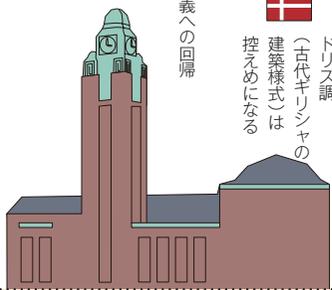
絵が上手な少年
先生や親のアドバイスで
芸術家の道をあきらめ
建築家を目指す

1885
スウェーデン・ストックホルム生まれ
グンナール・アスプルンド誕生



1910

古典主義への回帰



ドリス調
(古代ギリシャの
建築様式)は
控えめになる

1910



ドイツ、ベルギー旅行

1913

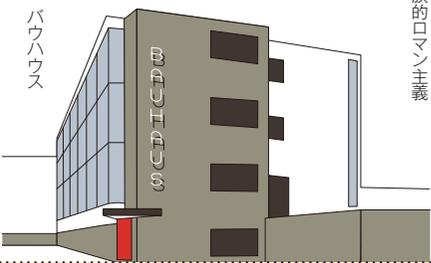


フランス、イタリア旅行

1915

中世的民族的ロマン主義

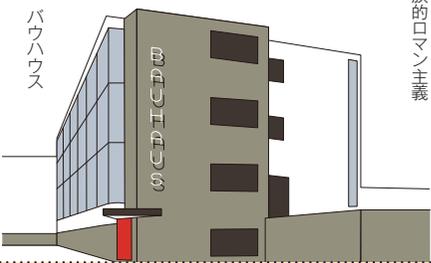
1914
エリエール・サリネン
ヘルシンキ駅を設計



1920

アルト、サリネンと
パーティで出会う
ル・コルビュジエ
「エスプリ・ヌーボー」創刊

1919
バウハウス



1923

「スカンディナヴィア・シネマ」にて
アスプルンドとアルト、初めて語らう



私はこの映画館を
建てながら、秋の夜と
木の黄葉のことを
考えていました

素晴らしい！インディゴ色の
丸い天井に輝く照明のきらめきが、
まるでイタリアの夜みたいです

1918

「森の礼拝堂」
イェルタと結婚



新古典主義＝古典の再現＋北欧の伝統

1918

戦争で兵役

アスプルンドの
事務所に入ろうと思って、
ストックホルムに行ったけど、
所員の空きがないからと、
断られたよ



1916

ヘルシンキの工科大学建築学科に入学
リンドグレンやサリネンに
古典主義とイタリア建築を学ぶ

1910

学校でフランス語とドイツ語は落第するが、
ロシア語は追試で乗り切る

1908

初等中学校に入学

1906

母逝去
母の姉フローラが後妻に



アルトは豊かな絵の才能を
持っていたので画家になる
ことも考えていたが、
社会に貢献する父の
仕事ぶりを見習い
建築家を目指す

1898

フィンランド・クオルタネ生まれ
アルヴァ・アルト誕生



1902

デンマーク・コペンハーゲン生まれ
アルネ・ヤコブセン誕生



ビクトリア朝の家に生まれる
刺繍、陶製の犬、クッションに囲まれて育ったが、
ある日、自室を真っ白に塗って父を驚かせた



美術教師が絵の具箱をプレゼントしてくれる程、
絵が上手だった
しかし、転校先で出会ったラッセン兄弟と
父の勧めで「絵の才能が使えるから」
建築家を目指す

カイ・フェイスカーが学生一行を連れて
アスプルンドを訪ねる
夕食後の即席コンペで
ヤコブセンが一番に選ばれた



僕やフェイスカー先生の
設計案より、アルネ君、
君の案がベストだね

1920



職業訓練校と並行して、
レンガ職人に弟子入り
メクレンブルクで石工の仕事の際に
ドイツ語を習得した

1921



アメリカに憧れてNY航路の船に就職
高層ビルの写真をたくさん撮る
船酔いのため客船係の仕事を断念

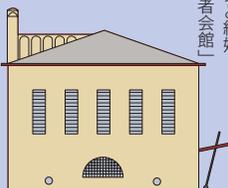
学校教育では新古典主義より
ドイツのピーターマイヤー調を重視

1924

王立芸術アカデミーに入学

1925

パリ裝飾博覧会アルテコ展に
椅子を出品 銀賞を受賞



1925

「労働者会館」
アイノと結婚

1923

ユバスキュラに事務所開設

1921

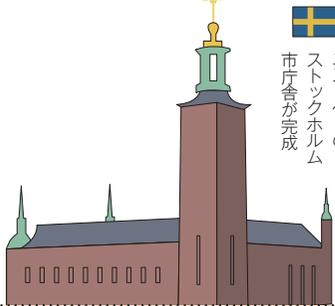
工科大学卒業
卒業設計は「ヘルシンキ博覧会」

1921

ストックホルム市庁舎を見学
コペンハーゲン市庁舎を見学

1925

1923
エストベリの
ストックホルム
市庁舎が完成



グンナール・アスプルンド／自然に寄り添う建築

森の墓地 [1940]

1914年、ストックホルムでは人口増加により墓地の拡充が必要となった。既存の墓地と隣接する75ヘクタールの敷地を対象に国際設計コンペが行われ、アスプルンドとシーグルド・レヴェレンツの共同設計案が1等に選ばれた。以来、2人はその生涯をかけて森の墓地と向き合った。1920年、「森の礼拝堂」を建てた年にアスプルンドは息子ウツレを亡くし、1940年に「森の火葬場」が完成した後、急逝する。レヴェレンツは1935年からプロジェクトを降りていたが呼び戻され、自身が人生に幕を降ろす1975年まで、残りの墓地の設計を手掛けた。1994年、森の墓地はユネスコの世界遺産に登録された。

礼拝堂と火葬場に向かう道の傍に立つ巨大な十字架は、コンペ応募時の提案にすでに現れていたもので、ランドスケープのアイコンとして荘厳な印象を刻む。一方、アスプルンドの設計には細部まで細やかな配慮と死生観が反映されており、優しさが感じられる。この墓地を訪ねる誰もが、生死に対峙する人間として、スウェーデンの森の豊かさを実感するだろう。

アルヴァ・アールト／自然に向き合う建築

セイナツツアロの役場 [1952]

1952年に完成したこの建物は、セイナツツアロ島の真珠との呼び声が高い。自治体が開催した招待コンペでアールトが勝ったのは、地形に対する建物の配置、素材の使い方、空間の構成とコストの点で優れた解答を示したからだ。また、高さ17mの高層部に議場を設置して議会の尊厳とモニュメント性を表現したことも高評価につながった。「なぜ17mもの高さを実現する必要があるのか」という質問に対し、アールトは「イタリアのシエナの建物は16mだったから」と答えた。イタリア好きのアールトは、あくまでもセイナツツアロにミニチュアの理想都市を実現しようと考えた。初期のスケッチでは大きな階段のある山岳都市をイメージしている。赤くこごつとしたレンガの壁は、通常なら検査ではねられる不揃いなものを、あえて積み重ねた結果できたものだ。フラクタルとは細部の質感が全体の質感と相似であることを指すが、アールトはレンガの使用によってフィンランド人の共感を得ることに成功した。無骨だが暖かさと親しみやすさを感じさせる。

アルネ・ヤコブセン 自然を取り込む建築

デンマーク国立銀行は、ヤコブセンの最後の作品となった。1961年の指名コンペで勝利。銀行業務が滞らない段階的な建設プログラムと都市景観上の配慮が評価された。第1段階として北側の中庭をもつ中層ブロックを1971年に完成させてヤコブセンは天寿を全うした。彼の死後、ディシング+ヴァイトリング建築事務所がアルネ・ヤコブセン建築事務所を引き継ぎ、第2段階として南側の中層部、そして第3段階として低層部を手がけ、1978年に完成した。

デンマーク国立銀行 [1978]

ヤコブセンはデンマーク国立銀行の指名コンペに勝つが、1978年の完成を見ずして1971年に亡くなった。しかしこの巨大な遺作にはヤコブセンの自然観が散りばめられている。建築は、道路からは壁に包まれた無機的な要塞に見えるが、その内部には緑があふれていることを誰が想像できるだろうか。

銀行窓口のホールや、従業員用ラウンジには植物の鉢を吊り下げたガラスケースが並び、銀行という堅いイメージの場所の中でも、伸びやかな緑が潤いと彩りを添える風景に驚かされる。SASホテルでも実現したこのガラスケースのプランを、ヤコブセンは1929年にすでに構想していた。未来の家の図面には、テラスの入口左右のガラスケースに割り当てた植物という文字が残っている。

国立銀行の奥には2つの空中庭園が存在する。池や石、ガラスの間に砂利を敷き、抑制された美学にもとづき緑を配した様子は日本庭園そのものだ。ヤコブセンには1950年のスーホルムの低層住宅で庭に竹を植え、成長の速さから剪定に苦勞した経験があった。現在、国立銀行では2人の園丁が緑の手入れを続けている。